



農事普及だより

(7月号 平成30年7月1日～7月31日)

〔発行〕鶴田町／鶴田町農業支援センター／鶴田町産業課
つがるにしきた農業協同組合鶴翔統括支店
西北地域県民局地域農林水産部農業普及振興室
〔編集〕西北地域県民局地域農林水産部農業普及振興室



気象

(平成30年6月25日 仙台管区気象台発表 東北地方3ヶ月予報より)
平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。気温は、高い確率50%です。



水稻

中干して「根づくり」、幼穗形成期深水かんかいで「花粉づくり」、適正追肥で「買ってもらえるおいしい米づくり」を進めよう！

1. 生育状況（6月20日現在）

- (1) まっしぐら（管内9地点の平均）
平年と比較して、草丈はやや短く、茎数はやや少なく、葉数はやや少なかった。葉数から判断すると、生育は1～2日程度遅れていると考えられる。
- (2) つがるロマン（管内8地点の平均）
平年と比較して、草丈は並み、茎数は少なく、葉数はやや少なかった。葉数から判断すると、生育は1～2日程度遅れていると考えられる。
- (3) 青天の霹靂（管内12地点の平均）
平年と比較して、草丈は短く、茎数は少なく、葉数は少なかった。葉数から判断すると、生育は3～4日程度遅れていると考えられる。

2. 水 管 理

- (1) 分げつ盛期～穂首分化期（6月下旬～7月上旬）
1株当たり茎数を「まっしぐら」「つがるロマン」では20本程度（栽植株数が70株／坪程度の場合）、「青天の霹靂」では18本程度確保した水田では、晴天で高温日（平均気温20℃以上）が続くような時は中干しを行なう。
- 中干しには、窒素の過剰発現の抑制、草丈の伸びの抑制、根腐れ防止等の効果がある。田面に軽くひび割れが入る程度とし、排水不良の水田では、2回くらい繰り返すと効果的である。ただし、生育が遅れている場合や低温が予想される場合は行わない。また、幼穗形成期までに必ず終える。

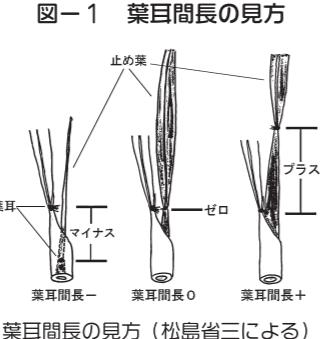
(2) 幼穗形成期

幼穗形成期（主茎の幼穗長2mm、出穂前25日頃）から穗ばかり期にかけては、花粉を形成し、また、稻の吸水量が多くなり、低温や干ばつに弱い。このため、幼穗形成期に達したら、気温の高低に関係なく水深10cmで10日間の「幼穗形成期深水かんかいで」を実施する。

(3) 穂ばかり期

穂ばかり期に当たる出穂前15～7日頃（主茎の葉目間長が-12cm～+4cmの頃（図-1 葉目間長の見方参照））は、最も低温に弱い。日平均気温20℃以下、日最低気温17℃以下になると予想される場合には、可能な限り深水（15～20cm程度）にして幼穗を保護する。ただし、冷水を急に入れると水温が下がるので、徐々に水を深くする。

高温時は、4cm程度の浅水にして水温の上昇を促し、時々水の入れ換えを行い、根の老化を防止する。



葉目間長の見方（松島省三による）

■ これからの水管理

生育期	寒い日	暖かい日	備考
分げつ盛期～穂首分化期（6月下旬～7月上旬）	5～6cm程度の深水	中干し	中干しは幼穗形成期までに終える。
幼穗形成期（出穂前25日頃）	幼穗形成期深水かんかいで（水深10cmで10日間）		
穂ばかり期（出穂前15～7日頃）	15～20cm程度の深水	4cm程度の浅水時々、水の入れ換え	日平均気温20℃以下、日最低気温17℃以下で、障害不稳発生の危険が増す。

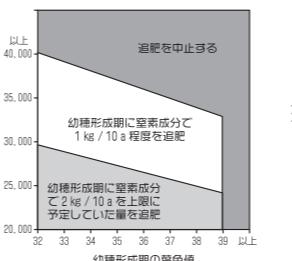
3. 追 肥

幼穗形成期（主茎の幼穗長2mm）に達し、かつ肥料が切れて葉色が淡くなつていれば追肥の適期である。

- (1) 「つがるロマン」、「まっしぐら」
追肥量は、生育状況を見ながら「つがるロマン」では窒素成分で10a当たり2kg以内、「まっしぐら」では2～3kg程度とする。
- 幼穗形成期に達しても葉色が濃い場合は、幼穗形成期後7～10日までの間に葉色が淡くなつたら追肥し、この時期を過ぎても葉色が淡くならない場合は、追肥しない。また、出穂前後の追肥（実肥）は、米の食味・品質を低下させるので行わない。
- (2) 「青天の霹靂」
追肥時期は幼穗形成期とし、それ以降は行わない。

「青天の霹靂」追肥判断カラースケール」等を用い、実際に生育調査を行った上で、追肥の有無・追肥量を栄養診断基準を参考に決定する。生育後半に土壤窒素発現量が多い水田では、無追肥とする。

生育指標 (幼穗期の草丈 × 10a 当たり茎 数 × 葉色値)	10a 当たりの追肥 対応(窒素成分量)
95万未満	幼穗形成期に窒素 成分で2kg / 10a を上限に予定して いた量を追肥
95万以上 129万未満	幼穗形成期に窒素 成分で1kg / 10a 程度を追肥
129万以上	追肥を中止する



4. 病害虫防除

- (1) 斑点米カメムシ類
水田周辺の休耕田や畦畔・農道等の雑草地に生息しているので、雑草が開花・結実しないよう刈取や耕起をこまめに行なう。なお刈取等は出穂2週間前（7月中旬頃）までに終了する。
水稻の出穂以降に雑草を刈り取る必要がある場合は、斑点米カメムシ類に効果のある殺虫剤を水田に散布した後、速やかに行なう。
ノビエ、ズイジ、クロクワイの多発田では、水稻の出穂前から斑点米カメムシ類が水田内に誘引され、斑点米率が高くなるので、除草や防除を徹底する。
- (2) 菓いもち
菓いもちの初発生は、近年、6月末から7月上旬に確認されている。初早期発見・早期防除が基本であり、発生状況に十分注意し、病気が見つかりしだい防除を徹底する。
- (3) 稲こうじ病
穂ばかり期の低温や日照不足、多雨で発生しやすくなるので、前年発生した水田を中心に、出穂前20日～10日に防除を行う。
防除時期が遅れる（出穂前10日以降）と、防除効果の低下や薬害の懼れがあるので注意する。



畑作

大豆

中耕培土・害虫防除をしっかりと行ない、品質向上に努めよう！

1. 中耕・培土

中耕・培土は根に空気を通し、根粒菌を有効に活動させ、不定根の発生、根系の発達を促進し、さらに倒伏防止効果がある。
1回目は本葉2～3葉期に行い、初生葉のつけ根まで軽く土寄せし、2回目は本葉5～6葉期に行い、第1本葉のつけ根まで土寄せする。

2. 除 草

- 発生している雑草の種類、大きさ、大豆の生育状況に合わせて除草剤を効果的に使用する。
- (1) イヌ科選択性除草剤の茎葉散布
雑草が大きくなると効果が劣るので、各薬剤の使用時期の範囲内で使用する。
 - (2) 広葉選択性除草剤の茎葉処理
「大豆バグラン液剤」は大豆の2葉期以降に使用できるが、雑草が大きくなると効果が劣るので、発生状況に応じて使用する。
 - (3) 畦間・株間処理
土壤処理、茎葉処理を行っても残草が多い場合は、畦間、株間処理除草剤が利用できるので、薬剤の特性に合わせ効果的に利用する。
大豆に薬剤が付着すると薬害が発生するため、泡状ノズルやカバーで飛散しないよう散布する。

3. 追 肥

子実を充実させるため、開花期前後に追肥する。追肥量は、窒素成分5～8kg/10aであるが、生育状態に応じて加減し、生育が旺盛な場合は行わない。

小麦

適期刈取りに努め、良品質小麦を確保しよう！

1. 収穫作業

- つがる市での出穂期は「ネバリゴシ」で平年より1日遅い5月21日、「キタカミコムギ」で1日早い5月20日であった。
「ネバリゴシ」は出穂後46～50日、出穂後積算気温830～950℃、「キタカミコムギ」は同じく50～55日、900～1,000℃が刈取適期であり、共に子実水分25%を目安とする。
「キタカミコムギ」は穂発芽しやすいので、天候などによっては子実水分30%の刈取が必要になる。この場合は速やかに乾燥機に張り込み、水分25%までは送風温度を40℃以下にして品質低下を防ぐ。

■ 積算気温からみた収穫期の目安

品種	ネバリゴシ				キタカミコムギ			
	830℃	950℃	900℃	1,000℃	830℃	950℃	900℃	1,000℃
5月20日	7月6日	7月11日	7月10日	7月14日				
5月25日	7月10日	7月15日	7月13日	7月17日				

注) 五所川原アメダスの日平均気温（6月18日以降は平年値）で算出天候や場の成熟状況、水分を確認して刈取時期を判断する。

6月21日現在、県生育観測ほ（板柳町高増）のふじの果実肥大は、横径3.8cmで、平年を上回っている。

1. 摘 果 の 見 直 し

黒星病の被害果が残っている場合は、着果状況を考慮し可能な限り摘み取る。また、良品生産に向け、一通り仕上げ摘果を終了した園地では、再度園地を見回り、摘果の見落としがないか、障害果や小玉果等の品質不良果がないか点検する。

2. 袋 か け

ふじは、有袋にすることで、つる割れの軽減や着色が向上し、収穫期が分散される。特に本年は大玉傾向で、夏場の多雨によるつる割れの発生が懸念されるので、有袋栽培に積極的に取り組み、7月10日ころまでに終えるようにする。

なお、本年は、黒星病の発生が多いことから、袋かけ時に被害果が見られた場合は摘み取る。

3. 徒 長 枝 の 整 理 と 支 杖 入 れ

病害虫の発生源を少なくし、薬剤の付着を良くするために不要な徒長枝を整理する。また、支柱入れや枝つきを行って樹の内部にも十分日光を入れ、葉の働きを高める。

4. 病害虫防除

斑点落葉病やモモシンクイガ、ハダニ類の増加期に入るので、発生動向に十分注意して散布間隔をあけてスケジュール散布を行う。

■ 薬剤散布（県りんご防除暦より抜粋）

※農薬はりんご園以外、他の作物、近隣の住宅等に飛散させない。

時期と散布量	主な対象病害虫	基 準 薬 剤
7月初め (6月27日～7月1日) (500g/10a)	斑点落葉病 ハダニ類 モモシンクイガ キンモンホソガ	ビレスロイド剤 アントラコール顆粒水和剤 又はパスマート顆粒水和剤 又はチラム剤 又は有機銅剤 又はオキシラン水和剤
7月半ば (7月12～16日) (500g/10a)	斑点落葉病、褐斑病 ハダニ類 モモシンクイガ リンゴコカクモンハマキ	アントラコール顆粒水和剤 又はパスマート顆粒水和剤 又は有機銅剤 又はオキシラン水和剤 又はアリエッティC水和剤
7月末 (7月27日～31日) (500g/10a)	斑点落葉病 褐斑病 キンモンホソガ ハダニ類 モモシンクイガ	有機銅剤 又はオキシラン水和剤 又はアリエッティC水和剤 又はダイパワーワー水和剤

注) フリンクトロアブル、ストロビードライ、フロアブル、ナリアWDGは防除効果低下のため基準薬剤から削除

（1） 黒 星 病
黒星病の被害果や被害葉は、

特産果樹



適期の房づくりで商品価値の高い果房に仕上げよう！

生育観測は（鶴田町境）のスチューベンの生育は、開花日が平年並の6月20日、満開日が平年より1日早い6月22日であった。露地シャインマスカットの開花日は、スチューベンより4日遅い6月24日であった。
7月は房づくりや害虫防除などの作業を適期に行う。

1. スチューベンの果房整形

果粒が小豆粒大頃（果房中間の粒径が5mm程度の頃）に果房の先端を1cm程度切除するとともに、果房の長さが12~13cmになるように果房上部の枝梗を切除する。さらに、果房の幅が6cm程度になるように長い枝梗を切り取る。

2. 摘房

新梢と果実との養分競合を少なくし品質向上と枝の充実を促すため、早めに行う。
着房数は下表を参考にして、実どまりの状態や結果枝の葉数を見ながら調整する。

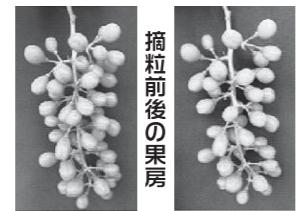
■ 着房の目安

品種	結果枝の葉数	着房数
	13枚以下	ならせない
スチューベン、 キャンベル・アーリー	14~18枚	1房
	20枚前後	1~2房
	25枚以上	2房
シャインマスカット	20枚程度	1房

3. 摘粒

(1) 摘粒の時期
果房形を整え、粒揃いや果粒肥大を促進するため、満開後15~25日頃（7月中旬）から始め、果粒軟化期前（8月上旬）までに終える。

シャインマスカットは、大豆粒大（7mm程度）頃までに終える。



(2) 摘粒の目安

品種	果粒数
スチューベン	70~80
キャンベル・アーリー	50~60
シャインマスカット	40~50

(3) シャインマスカットの摘粒方法

小粒果やさび果などの障害果のほか、果粒が外向きに並ぶように内側の果粒を除去し、1房45粒程度に仕上げる。早すぎる摘粒は、収穫時に小粒未熟果が混入しやすくなるので留意する。



4. 2回目の摘心

1回目の摘心後に伸びた副梢の展葉枚数が8~9枚になった頃に行い、伸びた副梢の葉を6枚残して摘心する。副々梢は2回目の摘心部位の先端のものだけを残して、他は全てかき取る。

なお、これ以降も副々梢が伸びる場合は3~5葉で摘心を行う。

5. 病害虫防除

■ 薬剤散布（県ぶどう防除暦：スチューベン基準より抜粋）

散布時期	薬剤名と倍数	
	殺菌剤	殺虫剤
大豆粒大 (7月中旬頃)	ジマンダイセン水和剤 又はアミスター10フロアブル 又はストロビードライフロアブル 又はホライズンドライフロアブル	1,000倍 1,000倍 2,000倍 2,500倍
	アグロスリンク水和剤 又はアディオンフロアブル	2,000倍 1,500倍

注) 1 大豆粒大以降、展着剤は使用しない。
2 ジマンダイセン水和剤（有効成分：マンゼブ）の年間使用回数は「2回以内」である。
3 晩腐病の発生が多い園地では、小豆粒大頃にベンレート水和剤3,000倍を特別散布する。
4 ストロビルリン単剤のアミスター10フロアブル、ストロビードライフロアブル及び、同じ系統の混合剤であるホライズンドライフロアブルは、薬剤耐性の懸念があるので、合わせて年2回以内の使用とする。ただし、ストロビルリン単剤は年1回以内の使用とする。
5 ハダニ類の発生が多い園地ではマイトコーンフロアブル1,000倍又はカネマイドフロアブル1,000倍を特別散布する。なお、本剤は8月以降に散布すると果面汚染の恐れがある。
6 コガネムシ類の発生が7月下旬にみられる場合は、アグロスリンク水和剤2,000倍、アディオンフロアブル1,500倍、スミソサン水和剤40 800倍のいずれかを特別散布する。



5~8月は「農薬危害防止運動」実施期間です

農薬の適正使用と隣接農地への飛散防止に十分気をつけましょう
○使用し残った農薬などは、河川等へ絶対捨てないでください。
○農薬を使用する場合には、必ず最新の「農薬登録情報」を確認してください。
○農薬は鍵のかかる専用の場所に保管し、管理を徹底しましょう。



翌年度の生産を見据え、収穫後の防除を徹底しよう！

1. 収穫（晩生種）

適期収穫に努め、収穫遅にならないようにする。

2. 雨よけ被覆資材の除去

樹体に対する悪影響を避けるため、収穫後速やかに除去する。

3. 施肥（礼肥）

樹勢維持と花芽分化促進のため、収穫後できるだけ早く施肥する。施用量は年間施用量の20%程度とする。

4. 病害虫防除

■ 薬剤散布（県おうとう防除暦：佐藤錦の基準より抜粋）

※農薬は、他の作物、近隣の住宅等に飛散させない。

散布時期	薬剤名と倍数	
	殺菌剤	殺虫剤
7月中～下旬 (収穫後)	オーソサイド水和剤80 又はオキシラン水和剤 又はチウラム剤	800倍 600倍 500倍
	スプラサイド水和剤	1,500倍

注) 1 南陽やサニットなどの晩生種では、灰星病やショウジョウバエ対策として晩生種の収穫前日頃を目安に有効な薬剤を特別散布する。また、灰星病の被害果は必ず取り、園地に放置しない。
2 褐色せん孔病（せん孔病）や、ハダニ類が発生すると早期に落葉し次年産の花芽充実に影響するので、収穫後散布を必ず実施する。



農作業中の熱中症に注意しましょう

～熱中症は適切な予防をすれば防ぐことができます～

- 暑さの感じ方は人によって異なります。高齢の方は特に注意が必要です。
- 皆で協力して、熱中症予防を呼びかけ合うことが大切です。
- 天候の変化が激しい時期ですが、高温が予想される日は、熱中症予防を忘れないようにご注意ください。



野菜

適切な温度・水分の管理で品質向上に努めよう！



1. かん水と追肥

かん水は、午前8~10時頃に行い、7段花房開花期頃まではかん水量を一定（1株当たり1.5リットルを目安）とし、生育や天候を見ながらかん水の間隔を調整する（1日おき→2日おき）。ただし、予想最高気温が28℃を超える日は、1株当たり2リットルを目安とする。2本仕立ての場合は、側枝1本を1株とする。

茎葉にしおれが見られたら、直ちに1株当たり0.7リットルかん水し、2~3時間してもしおれが回復しない場合は、再度0.7リットルかん水する（高温時は1株当たり1リットルを2回）。

開花花房の上葉のねじれの有無を觀察し、ねじれのある株が7割以下になつたら追肥する。

2. 葉先枯れ（カリ欠乏症）対策

葉先枯れ症状は、根張りが悪かったり、土壤中のカリシウムなどが過剰になると、カリの吸収が妨げられて発生しやすい。また、高温により徒長した場合でも葉内のカリが欠乏して発生するので、予防としてメリット黄400倍を1段につき2~3日おきに2回、開花花房を中心葉面散布する。

症状が見られた場合は、カーボリッヂ又はカリグリーン800倍を4日おきに2回、全葉に散布する。ただし、極端に草勢が弱い場合は使用を控える。

葉先枯れは、灰色かび病の発生源となるので、枯れた部分は早めに摘除する。

3. 高温対策

遮光資材、ハウス塗布資材等を活用して、ハウス内の温度をできるだけ下げる。被覆タイプの遮光資材は、概ね11時~14時頃までの展張とし、かけばなしにしない。

4. 病害虫防除

暴雨天が続くと灰色かび病や葉かび病が発生しやすくなるので、予防防除に努める。アザミウマ類の発生が多くなるので、防除を徹底する。

1. ネット発生後の管理

ネット発生以降は、最高気温28~30℃、最低気温15~18℃を目安に管理する。

ネット完成時は換気を十分に行い、日中しあれない程度にやや乾燥気味の管理とする。

草勢をみながら、3~5日おきに3回程度、葉面散布を行う。

N-P-K

（例） 青 …… 生育促進、葉色改善 (7-5-3)
黄 …… 着果促進、果実肥大 (3-7-6)
赤 …… 成熟促進、徒長抑制、花芽分化 (0-10-9)

成熟期の草姿・草勢は、収穫7~5日前で、「晴天日の昼間には少ししおれ、夜には回復するくらい」が望ましい。

最低気温が20℃以上では糖度が上がりにくくなるので、外気の最低気温が15℃以上であれば、トンネルを夜間開放する。

2. 収 穩

着果後の日数、外観の変化、試食など総合的に判定する。

タカミの場合、①結果枝の葉が徐々に枯れる、②果皮が濃緑から黄緑色に変わる、③ハタの周囲が突起し、離層が形成される、の順に現象がみられるので収穫期の判定基準とする。

3. 果実の生理障害

(1) 裂 果

果実肥大時、果肉の肥大に果皮の伸びが追いつかなくなつて発生するが、着果から鶏卵大前まで・ネット形成期・収穫期の3つのステージが特に危険性が高い。

収穫期の裂果は、開花後40日頃までの期間の乾燥・低温により肥大が抑えられた後、成熟期の潤沢な水分吸収によって発生する。また、多肥や未熟な堆肥の施用で収穫期に草勢が強まつた場合も発生する。

対策としては、カルシウム剤の葉面散布や下葉・徒長枝を除去し、急激な肥大を抑える。

(2) 発酵果

窒素・カリ過多、カルシウム不足、高温・照り込みによる草勢の低下、ホルモン着果、低温・乾燥による初期肥大の抑制などにより発生する。

対策としては、カルシウム剤の葉面散布、遮光を行う。

(3) 腐敗果

病原菌によるものと、生理障害によるものと2つある。

対策としては、病原菌の場合は、薬剤散布による予防、生理障害の場合は、発酵果と同様の対策を行う。



換気や遮光をこまめに行うなど、施設内の温湿度管理を徹底しよう！
病害虫の早期発見・早期防除に努めよう！



1. 今後の作業

輪ギクの上位葉のわき芽かきは、時期が遅れると摘み取った後の傷が大きくなるので早めに行い、摘葉は、小豆大の頃に中心の蕾を残して行う。

2. 病害虫防除

白さび病、ハダニ類、アザミウマ類、ヤガ類が発生しやすい時期なので、早期発見、早期防除に努める。施設栽培のヤガ類の対策では、薬剤の散布に加えてサイドや出入口に防虫ネット（4×4mm目以内）を設置する効果が高い。